

## 宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第29話

### インド独立の偉人ガンディー、チャンドラ・ボース、ネール インド

インド独立について真っ先に思い浮かぶのはガンディー、チャンドラ・ボース、ネールの三人の偉人である。ネール首相にはちょっとした思い出がある。上司からネール首相あての親書発送を命じられ緊張しながら京橋郵便局へ持って行ったのである。

1955年に日本経済を復興させるため、生産性向上運動を展開することが閣議決定され、財団法人日本生産性本部が設立された。生産性運動は第2次世界大戦で疲弊したヨーロッパ諸国の復興を目的にアメリカが物心両面で支援したもので、その成功を見てアメリカが日本でもと勧めたものである。その成果は著しいものがあり日本は焦土から奇跡的な復興を遂げ経済大国への道を歩んだ。当時アジア地域は欧米に比し経済的には極めて貧しい状況であった。日本はアジア諸国と共に生産性向上運動を推進していくため「アジア生産性機構」を作ろうと日本生産性本部が中心となって議論した。日本生産性本部は経済界・労働界・学界の三者構成のユニークな組織である。当時生産性本部会長は財界の重鎮であった東京商工会議所会頭の足立正で、東南アジア諸国へアジア生産性機構設立を呼びかけた。ネール首相への親書はその想いを綴ったものであった。

1961年アジア生産性機構（APO）が都内の青山に設置された。日本で初めて設置された国際機関である。予算は加盟国の国力に応じ各国政府が拠出金を負担した。日本の外務省はアジアのために大きな負担金を拠出した。設立当初はインドを始めとする8か国が参加し、その後加盟国が増え現在18か国が加盟している。



バンガロール市の賑わい

1996年インドを訪れた。初めて見るインドはどこへ行ってもエネルギーに満ち溢れた混沌とした世界にみえた。このパワーを持った国が独立国家として独り立ちしたのは今から75年前の1947年である。そう古い話ではない。

イギリスに抵抗しインド独立の父として無抵抗主義を掲げたガンディーの物語は、子供のころに読んだり、聞いたりして大層感動したものである、いつも半裸で杖をもち、眼鏡をかけた姿で登場する偉大な指導者の警咳に少しでも触れたいと子供心に願ったものである。

ボンベイ（現ムンバイ）にはガンディーが17年間も起居していたいわば彼の本拠地が今は記念館となって公開されている。



ガンディー記念館



ガンディーの遺品

物欲を捨てたガンディーのわずかな身の回りの品が遺品として展示されている。ガンディーが起居していた居間には寝床と糸車と竹の杖があったが、それを見つめながらガンディーの越し方に想像を膨らませた。

イギリスの植民地であったインドは常に独立を求め続けていた。第1次世界大戦が起きた時イギリスはインドに対し兵士や物資をイギリスに提供する見返りに、戦争終結後に

インドの自治を認めるかの約束をした。しかし結果は約束を反故にした上ローランド法（イギリスのインド政庁が制定した治安法、インド人の民族運動の弾圧を狙った法律で、インド人を無審理で逮捕し投獄できる）を制定した。この法律によってインドのパンジャブ州の非合法集会に対しイギリスは軍隊を動員し400名にのぼるインド人を殺害した。

当然民衆は憤然と立ち上がり、ガンディーを指導者として反イギリス、反植民地運動が燎原の火のように燃え広がっていったのである。先頭に立つガンディーは「非暴力不服従」を常に掲げ、完全自治を目指しインド全土に運動を広めていった。運動はヒンドゥ教徒とイスラム教信者との対立などあって前進後退を繰り返し、のちにインドはイスラム教を信じる現パキスタンとヒンドゥ教のインドに分離しそれぞれ独立した。

一方の当事国イギリスは、インドに対し弾圧を強め、ある時は英印円卓会議（1930年～32年にかけてイギリス政府はインドの将来をどのように描くかを目的にインドの政治集団を招き議論した。そこにはガンディーも参加した）をロンドンで開催するなどしたが所期の成果は上げられなかった。

インド独立運動は非暴力不服従を掲げるガンディーに対し、武器をとって立ち上がったのはチャンドラ・ボースであった。とった方法はまったく異なったが独立の立役者として忘れてはならない。

インドのチャンドラ・ボースは国民軍を設立し日本軍と共に英印軍・アメリカ軍・オーストラリア軍と戦った。しかし1945年8月15日、日本は連合軍に降伏しここに第2次世界大戦は幕を閉じた。インド独立において非暴力を掲げてイギリスに抵抗するガンディーに対し、一方武器をとってイギリスと戦うチャンドラ・ボースに対してもインド民衆は大きな共感を覚えたのである。

1948年にガンディーは狂信的なヒンドゥ教徒の凶弾に倒れた。国民は大きなショックを受け、悲しみに包まれた。

インドはイギリス連邦にとどまりながら独立宣言をし、インド社会の根深いカーストによる差別禁止や不可触選民制度の廃止を掲げる新憲法を発布した。独立後のインドはガンディー等と共に大きな役割を果たしたネールを首相とした。ネールは東西の大国アメリカとソ連邦（現ロシア）いずれの陣営にも属さない非同盟政策をとった。

マハトマ・ガンディー（1869年10月2日～1948年1月20日）インド独立の父



ガンディー記念館の展示

グジャラート州ポールバンダルで生誕、父親は当時の藩王国の宰相を務めた。（＝マハトマとは聖者、偉大なる魂の意）。

13歳の時インドの風習である（幼児婚）でカストゥルバと結婚する。18歳のとき弁護士になるためロンドンへ行く。ロンドンでインド哲学にひかれ学ぶ。1893年法曹学校を卒業しイギリス領南アフリカ連邦（現南ア共和国）へ渡ったのが23歳で、それから45歳まで22年間南アに住み、弁護士を開業するも白人至上主義で自ら人種差別を体験した。

こうした実体験によりインド人としてインド哲学やヒンドゥ教に目覚め、ガンディーの闘争の哲学ともいえる非暴力思想を醸成していき白人優位社会に対しインド系移民に対する権利回復運動を始めた。

1915年インドに帰国する。施行された悪法ローランド法に対し不服従運動を展開し、また国産品愛用運動を始めた。そのきっかけはインドで生産される綿花はイギリスへ運ばれ加工し、その綿製品をインド人が買うといったことから、インド人自らが綿製品をつくりイギリス製品の不買運動をすすめた。ガンディーは自身で実践し糸車を常に傍に置いて糸を紡いだのである。当然イギリス官憲からにらまれ6回逮捕され投獄された。1920年インド国内はヒンドゥ教徒とイスラム教徒の対立が激化しガンディーはこのことに頭を痛めた。そこで自身を犠牲にして断食を続けるなどしたため両教徒は平和解決を誓った。またイギリス政府の専売であった塩をガンディーは海水を熱し塩をつくった、法を破ってみせたのである。いわゆる塩の行進といわれているものであるが多くの民衆が続き政府を困らせた。

ガンディーは1948年狂信的なヒンドゥ教徒の凶弾により暗殺された。第2次大戦が終結したがイギリスは最早インドの独立を止める手立てはないと、1947年ネールの率いるヒンドゥ教多数派地域のインド連邦の独立を認め、1950年インドは共和国へ移行し英連邦の一員になった。ガンディーの誕生日10月2日はインドでは国民の休日となっているが、国連ではこの日を国際非暴力の日、国際デーとすることを2007年の総会で決した。

ネタジ・スパス・チャンドラ・ボース（1897年1月23日～1945年8月18日）

先祖はベンガル王朝の財務長官や陸軍長官を輩出している名門の家に生まれ、イギリス系のミッションスクール、カルカッタ大学、さらにイギリスのケンブリッジ大学大学院へ進んだが1921年24歳の時にインド独立のための運動家としてボンベイ（現ムンバイ）に帰国し、カルカッタ市長になる。1928年新しい独立連盟が組織され、ボースやネールもメンバーとなった。ガンディーの反英運動には共鳴したが非暴力運動には反対を唱えた。



チャンドラ・ボース像

ボースはインドの国内だけでは独立を勝ち取れないと考えるようになり国際社会に訴えねばと思ひ、ドイツに行き1941年ヒトラーにあう。ドイツがイギリスに戦勝して結果インドが独立できると考えたが、しかしドイツ側の反応は思わしくなかった。この頃日本軍はイギリス軍のマレー半島、シンガポールへ破竹の進撃をおこなった。イギリス軍の将兵はインド兵が中心であった。日本軍はインド兵に降伏を進めインドの独立に手を貸したいと訴えインド兵たちは諸手を挙げた。ボースはこれを聞きつけドイツから東京へ向かう1943年のことである。東条英機首相はボースの人柄と熱意に対し魅力を感じる。日本の対アジア政策である

「大東亜圏構想」のため東京で大東亜会議を開いたが、チャンドラ・ボースはオブザーバーとして参加した。日本の協力を得てインド独立を勝ち取ろうとした目論見は日本の敗戦により潰えた。ボースはさらに旧ソ連の支援を得ようと中国の大連経由でモスクワに向かう予定で台湾空港を離陸した。そして直後に墜落し命を失ったのである。茶毘に付され遺骨は日本に運ばれ杉並区にある頂光山蓮光寺に安置された。蓮光寺境内にはボースの胸像があり、ネール首相やインディラ・ガンディー首相も供養に訪れている。境内に置いてあるサイン帳を見ると英語・日本語・ヒンドゥ語などが記してあり、今でも多くの人が訪れている。(ネタジ=総統の意)

### ジャワハルラール・ネール (1889年11月14日～1964年5月27日)

インドの独立運動の指導者で初代首相・国民会議議長を務めた。国際的には非同盟運動を目指し第三世界のリーダーとして存在感を示した。国内では政教分離を提唱した。インドのインディラ・ガンディー首相はネールの娘で、ラジーヴ・ガンディー首相は孫息子である。

ネールはインド北部の現ウッタル・プラデーシュで、弁護士でインド独立運動家の父を持つ富裕な家に生まれた。

イギリスのハロー校を経てケンブリッジ大学を卒業し、弁護士の資格を取得するも、折からインド独立の先頭に立って活動していたガンディーやチャンドラ・ボース等と共に独立運動の指導者になっていく。1929年父親から国民会議議長を引き継いだ。何度か議長に再選されたが、この間逮捕、投獄され獄中生活は延べ10年に及んだ。

独立を勝ち取り難問山積するインドの初代首相に選ばれ、まず新憲法を1950年1月26日に発布した。普通選挙、基本的人権の尊重さらには議院内閣制などを大胆に盛り込んだ。ネールの主張は社会主義と政教分離である。ネールに対する国民の信頼は厚く終生政権を担うこととなった。

独立前のインドには各地に藩王が存在していたし、インドにはイギリス以外の仏領やポルトガル領の植民地もあったが、ネールは全て解決し全インドを今日見る独立国家とした。

ネールは終生首相と外務大臣を兼務し、中国の周恩来、インドネシアのスカルノ、エジプトのナセルとアジア・アフリカ会議(バンドン会議)で「平和十原則」を定めるなど国際的にも大きな足跡を残した。1964年在任中に心臓発作で死去した。享年75歳であった。(1996年)

参考) インド点描 宮崎汎 保険公庫月報・1996年7月号より転載

1996年、インドは国際社会の中で脚光を浴びている。半世紀に及ぶ実質的な「経済鎖国」時代に別れを告げ、経済政策の大転換を打ち出しているからである。

ニューデリーでもボンベイ（現ムンバイ）でも到着してまず驚かされるのは、日本人の持っている貧しさの概念をはるかに超える、極貧にあえぐ人々の群れであろう。シンガポールやタイ等と比較してみると、同じアジアの経済圏にありながら、すさまじい落差である。インドの社会構造は、一握りの富裕階層と何億人もの貧困層からなる二極構造であった。

ところが、ここにミドルクラスと呼ばれる新しい階層が出現しつつある。耐久消費材である車やTV、冷蔵庫などを購入し得る所得階層と位置付けられ、その数は1億とも2億人とも言われている。今後国内消費市場を支えていく主役たちである。加えて新経済政策によって、輸入関税が300%から現在の50%程度にまで引き下げられ、一挙にインドを魅力ある大市場に変えつつある。

ところでこれまで、私たちの同国に対する関心は、まことに希薄であった。例えば日本人観光客の数でみても、ハワイに年間117万人、シンガポールには62万人も訪れているのに、インドには6万人と極端に少ない、邦人進出企業の数でもタイへの1575社に対し対印投資企業は140社である。因みに日本人駐在員数でみるとタイはバンコク市内だけで5000人を超えているのに、広大な国土を持つインドには全土で1600人しか駐在してない。

一方、インド側の日本への関心は強く対日感情はすこぶる良い。在印日本大使館によると、最近の調査でも一番好きな国は日本と答えているという。日米自動車交渉で大国を相手によく戦ったと高い評価を下し、またアジア各地で問題となっている、50年前の戦争責任についても、日本の立場をなぜもっと主張しないのかといぶかる。国際社会でとかく対日批判の多い昨今、こうした好意的な反応を示してくれる国は珍しい。

経済開放政策によって、各国の対印投資熱は高まるばかりである。過去3年間にアジア各地からだけでも15000件の投資案件が寄せられ、中国さえも打診してきたというから驚く。

ところがインド版シリコンバレーとして一躍注目されたバンガロール市はインフラ整備が追い付かず、先ごろ最早製造業に限っては受け入れを認めないと宣言した。インフラ整備は、外資導入にあたってのインドのウィークポイントであろう。電力は月100時間も停電し、工場やホテル等は自家発電を余儀なくされ、電話の普及率は0、9%である。だがこうした厳しい環境の下で既に企業経営に取り組んでいる邦人企業を見ると成功例が目立ち、むしろ失敗したケースは皆無であるという。その中には生産が追い付かず顧客に半年も待ってもらうスズキ自動車や売れに売れて常に在庫ゼロが続く日清食品など大成功している企業もある。

さて私たちが同国を訪ね閉口するのは最高級ホテルの水道の水さえ一滴たりとも飲めないという衛生状態の悪さであろう。しかし現地ではまるでドブのような水たまりで水浴し、食器さえ洗っている。このような光景を目の当たりにして日本の厚生省の水質基準の厳しさに改めて感謝した次第である。

日本人には仏教国のイメージが強いインドだが、二週間の旅で仏教を連想させるものは博物館の石仏ぐらいで、ほかには見当たらなかった。やたらと目に付くのは、赤い舌を出していたり象の

鼻を持ったおどろおどろしたヒンドゥ教の神々ばかりである。国民の82%が信者だという。仏教徒はごく少数で0,7%である。また日本人が直ぐ思い浮かべるカースト制度は、私たちが理解している4つの階級があつて等という単純なものではないらしい。結婚とか職業など社会生活の様々な場面では厳然と存在しているが、長年現地で生活している邦人に尋ねても実態はよく判らないという。企業経営上でも特に意識はしてないとのことであつた。

新経済政策はいろいろな側面にじわじわと変化をもたらしつつある。国際空港の壁には、“客にもものをねだるな、客の荷物を調べるときは、現金や貴金属のありそうなところは探るな”と官吏心得べからず集が大書してあつた。国としての体裁を取り繕うよりもその前に何としても改革せねばという強い姿勢が見え、そこに爽やかさを感じた。

紙幣にさえ14もの言語を表示せねばならない多民族国家を一つの方向に導いていくことは至難であろう。納税者は総人口のわずか0,7%であり税制の抜本改革が求められるなど、日本から見ると気の遠くなるような課題が山積している。

そういえば街中でインド人の笑顔にはめったにお目にかかれない。9億に及ぶ人々が仏様のようなほほえみの顔を取り戻し、私たちをにこやかに迎えてくるのは21世紀になってからであろうか？

余談 信州から上京してまず行ってみたかったところは上野動物園であつた。目的は生れて始めてみる実物の象であつた。世のなかにこのような大きな生き物がいることに驚きしばらくたたずんだ。この象はインドのネール首相の愛娘インディラと名付けられネール首相が日本に送ってくれたものだった。